

一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

2016 年夏期インターンシップ論文集

期間：ベトナム及びカンボジア 2016 年 8 月 21 日（日）～2016 年 9 月 1 日（木）
カンボジア 2016 年 8 月 28 日（日）～9 月 4 日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国及びカンボジア王国

参加人数：25 名

男女割合：男 7 名、女 18 名

日本国籍者：25 名

参加大学：新潟大学、筑波大学、中央大学、東京外国語大学、龍谷大学、関西外国語大学、早稲田大学、京都大学、大阪大学、筑紫女学園大学、神戸女学院大学、関西大学、京都府立大学、京都女子大学、名古屋市立大学、京都産業大学、奈良県立大学、奈良女子大学、北九州市立大学、沖縄国際大学

帰国後の活動：（関西での修了式及び事後研修会）

日時：9 月 13 日（火）14：00～15：00

場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館、大阪市

（福岡での修了式及び事後研修会）

日時：9 月 21 日（水）14：00～15：00

場所：博多 リファレンス 駅東ビル



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア・ベトナムスタディツアー】

関西外国語大学 外国語学部 2年生

私は、この8日間のカンボジアでの研修を通して一番深く考えたことが「幸せってなんだろう？」ってことである。このことは、最終日のディスカッションのテーマによって考えさせられたことでもあり、一番印象に残っているためかもしれない。カンボジアに行く前の私のカンボジアへのイメージはアンコールワットが綺麗など良いイメージもあったが、全体的に技術が遅れている、生活していくなかで不便なこと危険なことが多い、貧しい、ストリートチルドレン、地雷、特に戦争などといった悪いイメージがありカンボジアの人々は幸せに暮らしているというイメージはあまりなかった。しかし、今回の研修でカンボジアへのイメージは大きく変化し、カンボジアの秀逸点と問題点がはっきりみえ、そこから幸せについて改めて考えさせられた。

最初に、カンボジアの秀逸点においてである。特に私にとってカンボジアの良さを感じられたのがカンボジアの人々である。まず、マーケットや日本語学校、ゴミ山や街中でたくさん笑顔が見られた。マーケットでは、みんな日本語が上手でたくさん声をかけられ断っても嫌な顔せずまた来てねと笑顔で言ったり、移動中のバスやトゥクトゥクから外を眺めていると多くの人が笑顔で手を振ってくれた。日本では見られないことで素敵だなと思いカンボジアの人々の温かさを感じた。ゴミ山では、ある少女からゴミ山での仕事のことを聞いたとき楽しくない、本当はしたくないと言っていたがそんな望んでいない生活の中でも同じ環境にいる友達や家族と一緒に働いて笑顔の人も見られた。次に、カンボジアの人々の考えが日本と違って魅力を感じた。日本では、よく学校や親に将来のことを考えるように言われる。一方カンボジアでは、倉田さんの話であったがカンボジアの人々の考えはその日その日を一生懸命、楽しく生きる、だからあまり将来のことを考えないという。私は、この考えを聞いたとき驚いたが、その日その日を精一杯楽しく生きることで毎日が楽しくて幸せな人生を送ることができると思う。これは、自殺率にも現れているようだ。カンボジアと日本の自殺率を比べたとき、カンボジアの方が少ない。私は、発展途上国のカンボジアと先進国である日本だと日本の方が技術的に発達していてあまり不自由せずに生活できる日本のほうが低いと思っていたから意外であった。次に、カンボジアの人々のハングリー精神の強さである。日本語学校では教室に入った瞬間の彼らの元気の良さと日本愛いっぱいのふるまいに驚き、とても嬉しかった。そして、学校のことを聞くとみんな日本にはお金がなくて行けないけど、勉強を友達と一緒にできるから楽しいと言っていた。彼らは、私たち日本のように勉強においても恵まれた環境のなかで勉強しているとは言えないと思う。日本語教師の不足問題やお金がなくて日本に行ったことがある人もほとんどいなかった。しかし、とても日本語が流暢で、日本語が上手になるために熱心に私たちにアドバイスを聞いたりと彼らは与えられた環境のなかで一生懸命努力をされていて感心した。日本では、今の時代留学



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

するのがふつうになっていて自分も留学しなきゃ流暢には話すことができないなど思っていた。しかし、彼らの話を聞いて自分の考えが小さく感じ彼らを見習わなきゃと感じた。カンボジアの人々は、とても楽観的で陽気で雰囲気がとても温かく、毎日を楽しそうに生きているんだなと感じられた。

次に、カンボジアの問題点にも間近で触れられた。特に間近に触れて胸が痛かったことが物乞いをする幼い子どもたちである。プノンペンでは、たくさん車やバイクが行き交う道路のなか窓の外から物乞いをする光景や、観光地では目も合わせず感情もない様子でただ値段を繰り返して物を売る光景が多く見られた。そして、ゴミ山の問題である。ゴミ山は、村人の収入源の1つで彼らにとっては家族と暮らすためにはとても大事な場所だと聞いた。しかし、ゴミ山は想像以上の悪臭で実際に農作や彼らの健康にも影響が出ているようだ。ここでは、子どもたちも一緒に働いていてさきほど秀逸点での例でも挙げたがそこで働いている少女はケガを何度かしたしできたら働きたくないと言っていた。そこで働く大人は、市内で働きたくても騙されて収入を得られないからしょうがなくここで働くしかないと言っていた。もう1つ、カンボジアの政府である。まだ詳しくこのことに知識はないが、政府は大事なことに目を向けてないように感じられた。これはさきほど挙げた2点の問題にも関係すると思うが、ゴミ山においては悪影響が出ているのに何も対策をとってないと聞いた。ゴミの焼却所を作る予算がないと理由はあるが何か少しでも改善できることはあるのではないかと感じた。そして今、カンボジアは観光業に力を注いでいると聞いたがそこだけに目を向けずに国民に悪影響を与えていることにも目を向けるべきではないかと感じた。行く前とはまた違う問題点が見えてきて、私は全体的にみてカンボジア政府がカンボジアの現状に真剣に目を向けるべきだと思った。

このようにカンボジアの秀逸点と問題点を見てみると日本とは全く違った点がそれぞれ挙げられた。そして、最終日のディスカッションでカンボジアと日本とどちらが幸せかというテーマでカンボジアの上で述べた点と日本と比べて結論が出たのがそれぞれの違った幸せがあるということであった。経済的に豊かで安全で恵まれている日本が幸せな国とは言えない。日本のような国でも違った問題点がたくさんある。一方、発展途上国で貧富の差が激しいカンボジアが不幸な国とも言えない。そんなカンボジアでは、たくさんの幸せそうな笑顔を見たり、毎日楽しそうであった。そして、ディスカッションのときに最終的に浮かんだ疑問が「幸せってなんだろう」であった。同じ日本人であるメンバーでも違った幸せが挙げられた。だから、幸せはその人その人が幸せと感じたらそれで良いのだろうと私この研修を通して感じた。カンボジアに行って、幸せについてこんなにも深く考えさせられるとは思ってなかった。しかし、今回の研修でこれからの自分の生き方を見直す良いチャンスになり、さらに自分が置かれている恵まれた環境、当たり前と思っている有難さ、忘れていた心の純粋さなどたくさんのことを思い出せるチャンスにもなった。本当に今回の研修は自分にとってかけがえのない経験になった。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

早稲田大学 法学部 2年生

「カンボジアに行ってきたんだ」と言うと、たいてい、「アンコール・ワットがあるところだよ」と言われる。私も、最初のカンボジアのイメージはそうだった。しかし、たまたま観た映画「僕たちは世界を変えることができない。But, we wanna build a school in Cambodia.」（東映, 2011）を観たことがきっかけで、カンボジアの現状を知りました。そして、自分の目で見たいと思い、このツアーに参加した。

まず、この国の歴史、そして、それが今のカンボジアにどのような影響を与えているかがよくわかった。1953年の独立以後、1960年代までは、ASEANの中でも発展した国であったのに、ロン=ノル軍事政権を経て、ポル=ポト政権時代に、知識人を虐殺したことによって、発展はほぼゼロからのスタートとなってしまった。主力の縫製業も、人件費が安いからという理由で様々な企業が進出しているのであって、付加価値はなく、給料値上げを要求するようになれば、そのような企業も撤退するだろう、と聞いた。ほかの国に頼らざるを得ない今の状況を脱して、自立した国になるのは、戦後世代が教育を受け、国を引っ張っていけるようになってからだと思う。そうだとすると、カンボジアが他国に頼らず、本当の意味で発展するようになるのはもう少し先であり、今はそのための充電期間のように感じた。

次に、「発展」とは何かを考えさせられた。私が「発展した国になる」と聞いてイメージするのは、インフラ整備が完了していて、ビルが乱立し、経済発展が進んだ国になることであつた。イオンモールを見たときも、カンボジアは発展してきていると感じた。しかし、同時に、それは、日本人の目から見た「発展のかたち」の価値観の押し付けであつて、カンボジア人には馴染まないのではないのかとも思った。というのも、実際にイオンモールに入ってみると、その中の雰囲気は日本のものと全く同じであり、客層は明らかに違ったからである。また、KURATA ペッパーで倉田さんから伺った「アリとキリギリス」のお話で、様々な価値観があり、自分の価値観を疑うことの大切さを知った。日本と全く同じ大型ショッピングモールをカンボジアに作ることは、日本の価値観の押し付けになっていないか。カンボジアの発展に本当に寄与するのか。屋台が少なくなり、カンボジアらしさがなくなってきて、味気のないビル街になってしまうのではないか。そうではなくて、日本のものをカンボジア人になじむかたちで取り入れるべきではないか。一度自分の考え方を疑うと、自分の中で様々な考え方が出てきた。

そこで、実際に、カンボジア人はイオンモールがあること、そして店舗数が増えることをどう思っているか、日本語学校の先生に聞いてみたところ、イオンモールにはよくウィンドウショッピングに行くし、ゲームセンターやスケート場があり、よく遊びに行くと言っていた。また、イオンモールが増えることは嬉しいとも言っていた。その話を聞いて、「大型ショッピングモールではなく、屋台のあるカンボジアらしさを残してほしい」というのも、実



は、先進国のエゴの押し付けなのかなと思った。「カンボジアはカンボジアらしく発展してない感じのままであるべき、先進国のようにビルばかりじゃつまらない」というようにもとれるからだ。日本は、明治維新のときに外国のものを次々に、そのままのかたちで取り入れ、賛否両論あるものの、半ば強制的に発展の外形を作ったことによって、今の日本がある。そうだとするならば、今のカンボジアも、外国のものをそのまま取り入れ、いろんなことを吸収する時期だと思う。もう少ししたら、日本の経営手法を学んだカンボジア人による新たな企業ができるかもしれない。

最後に、このツアーで一番感じたことは「教育」の大切さです。勉強しなければ、現状維持もしくはそれ以下になってしまうかもしれない。勉強をし、いろんな世界を知ることによって、現状を変えようという原動力になったり、将来の選択肢が増える。それは、今までしっかりと義務教育を受け、高校に通い、今、大学で学問をしている私が一番感じていることだし、カンボジアでも同じだと思う。義務教育は一応小・中学校9年間ある。しかし、農村部では子供が労働源になっていたり、学校が遠かったりして、学年が上がるにつれて辞めていく生徒も多いということを知った。教師不足や運営費不足など様々な問題はあれど、一応制度はできているのに、このような現状があるのは残念である。これでは、現状を変えることはできない。農村視察で、現状のまま生きていくには不自由ない、と中学校の先生は言っていたが、勉強の楽しさだとか、選択肢が増えることの喜びだとか、より快適な暮らしだとか、仕事のやりがいだとかを知らずにいるのは、もったいないように思う。また、貧困層が現状を変えようとしなければ、富裕層との格差はますます広がり、いつか、怒りの塊となってまた、ポル=ポトのような人が現れるかもしれない。過去と同じ失敗を繰り返さないために、きちんと学ぶ必要があると思う。

ガイドさんの話の中で、カンボジアではポル=ポト時代の教育が行われていないということを知った。現在普通の生活に戻っているポル=ポト派の人々が、責められる可能性があるというのが理由の一つであるが、それはあくまで表向きの理由で、本当は政治的利益のために隠しているように思う。教育というのは、国民が正しい判断をする重要な材料となる。政府にとって、不都合なことは教えないというのは、つまり、政府の都合のいい情報しか流さず、国民に現政権を判断する材料を与えず、反対勢力が出ることを抑えようとするにもつながる。対立する意見があることを前提に、議論の中で、よりよい選択を模索するのが民主主義のあるべき姿であって、対立勢力をつぶそうとするのは、独裁政治の始まりのように思える。政府の利害にかかわらず、歴史もきちんと教え、同じ悲劇が二度と繰り返されないよう、次の世代につないでいくことが重要である。そのうえで、ポル=ポト派で処刑していた人たちもまた被害者であると、しっかり伝えなければならない。

私は、最近、大学で学んでいることが生かせる場が具体的に見えてこず、勉強へのやる気が薄れてきていた。そんな自分を変えたかったのもこのツアーに参加した理由の一つである。結論から言えば、考え方が大きく変わった。今自分が当たり前のように大学に通って



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

るのは、実はとても幸せなことで、通えなくても通えない人がたくさんいるということがよくわかった。そして、毎晩の交換日記やディスカッションで、メンバーの様々な意見を見て、もっと勉強しなければ、と感化されたし、今まで自分が勉強してきたことは無駄になっていないと実感した。自分の将来やりたいことまでは、具体的に見えてこなかったけれど、今まで自分の将来の選択肢の中になかった「国際支援」や「国際協力」という新たな分野に興味があった。TAYAMA 日本語学校で、たった1, 2年しかやっていないのに、ペラペラ話せたり、日本の文化をしっかりと吸収できていたりする姿を見て、勉強に対する姿勢も変わる気がする。

このツアーで得られたものは、それだけではなく、素敵な仲間と出会えたことだ。こんなに考えさせられ、カンボジアに真剣に向き合い、自分を見つめ直すことができたのは、同じように本気で研修やディスカッションに臨むメンバーがいたからである。

日本に戻れば、私を刺激してくれるカンボジアの人たちや、仲間はいない。しかし、周りに流されず、このわくわくした気持ちを忘れず、これから様々なことに挑戦し、様々なところに行って、たくさんの人と出会って、今回のスタディーツアーのように自分の凝り固まった価値観を崩していきたい。



【1 カ国インターンシップに参加して】

沖縄国際大学 経済学部 3年生

今回のインターンシップでは、参加者の仲間や、引率の方、ガイドさんなどにとっても恵まれ、たくさん学べるインターンシップとなりました。

私にとって、発展途上国と呼ばれる国では、経済的には豊かな暮らしをしていないが、幸せそうな生活を送っていると聞くので、それがどのような暮らし方なのか実際に見てみたいと思ったことがインターンに参加する大きな理由でした。実際にインターンシップでカンボジアに行き、現地の方々の明るさや笑顔などを見ることでそれらを見ることができましたと思います。

私は、今回のインターンシップで学んだことは大きく分けて2つあります。

一つ目は日本に比べて経済的には豊かではないが幸せそうな生活をしているカンボジア、もう一つは、それでも大きく深い問題を抱えているカンボジアです。

カンボジアでお会いした方々は、明るく社交的な方が多かった印象があります。私たちが日本人だとわかると、「味の素！」と声をかけてくださったり、知っている日本語を話してくださったりと、積極的に交流をとってくれていたのを覚えています。また、日本に比べ経済的にいい生活をしているとは言い難いですが、昼間から気持ちよさそうにハンモックで昼寝をされてたり、おしゃべりをしている様子を見ると楽しそうだなと思うこともありました。日本では、昼は学校や仕事に行っていることがほとんどで、あまり考えられる光景ではないのですが、そういった生活もあり、また、楽しそうにしているということを知るだけでも、価値観の多様性を感じられた旅だったと思います。

一方、日本にはあまり考えられていないが、カンボジアでの問題というのも実際に勉強できました。それは政府にお金がないことも原因の一つにあると考えられますが、ゴミ山や教育などの問題です。ゴミ山の匂いはきつく、健康にも悪いのですが、そこでとれるペットボトルなどのお金になる資源を得るため、ゴミ捨て場で収集活動をしている人がいました。日本でなかなか見ない光景から考えることは多くありました。また、教育の面でも、教える人が少ないなどという問題も見えてきました。

私たちは、カンボジアのいいところや問題点を学んできましたが、今回のインターンシップで学んだことは机上の知識だけではなく、実際の現場を見るのが大きな収穫だったと思います。インターンに行くことによって、カンボジアが一層身近に感じられました。

今回学んだことは多種多様で、様々な視点で考えることができると思いました。これからも様々な視点で物事を見ていきたいと思えます。

今回は、貴重な体験をすることができました。本当にありがとうございます。



【カンボジアでの教育の重要性】

神戸女学院大学 バイオサイエンス学科 2年生

私はカンボジアで、一番次のことを実感した。経済発展の陰で置き去りにされる弱者がいる。カンボジアにはびこる様々な社会問題について学んだが、どれも犠牲となっているのは無知な貧困層であった。

カンボジアの諸事情には、ポル・ポト政権という歴史的背景があった。1960年代、当時カンボジアは一定の繁栄を享受していたが、70年代に台頭したポル・ポト政権は国土を破壊し疲弊させた。彼は知識人を中心に大量虐殺を行った。キリングフィールド、トゥールスレン収容所博物館はその深い傷跡を遺す場所であった。高く積み上げられた頭蓋骨やまだ地面に埋まっている骨の破片は、衝撃的だった。ぼんやりとした知識が、かつてここで殺された人の体の一部を見て実感となり、目に焼き付いている。「平和」というものはとてつもなく重いものだと思い知った。平和であることが当たり前で平和でない世界を知らない私たちは幸運で恵まれている。

ポル・ポト政権は人材不足や社会経済基盤の荒廃等様々な後遺症を現在に残した。国民は教育、保健、医療等の基本的な生活分野における社会サービスを受けることを制限した生活を余儀なくされた。貧困や高い非識字、ゴミ山、HIV等の問題はここからきているのだろう。農村部では電気や水道も整備されていないことが珍しくない。教育をまともに受けられる子供も少ない。アンコールワットのような人が集まるところでは子供が物乞いをしていた。ゴミを漁り生計を立てる人々、HIVで入院しても家族のためにはやく働かねばならないと話す労働者もいた。

カンボジアは今、先進国の支援を受けて経済はかなりの回復をみせ、国家の再建が図られている。しかしこの経済発展に便乗し豊かになっている地域はほんの一部でしかない。一握りの人々だけが富を独占し、カンボジアの大部分を占める農村部の人々が様々な弊害を抱える現状を変えていかなければならない。そのためにはやはり、教育が必要である。

教育をうければ読み書きそろばんが出来るようになる。それは安定した職や正当な権利をもたらす。HIVなどの感染症を予防する手立てとなる。また知識があればポル・ポトのような独裁者を二度と生み出さない社会を作ることができる。ただし、学校教育の普及にはお金や時間がかかる。効果もすぐにはでない。そのため一番大切なのに一番後回しにされる分野でもあるのだ。私はこのインターンに参加するまでこんなにも教育が大事なものだとは分かっていなかった。知ることの大切さを学んだ。現地の農村で、学校に行ったことのない親は子供に教育を受けさせる重要性を分かっていないため学校に行かせないという話を聞いた。日本に帰った今、このような人々を中心としたカンボジアの人々に教育の必要性を知ってもらえるような活動がしたいと思う。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

このインターンシップではたくさんことを学んだ。そして私が気づかなかったことを教えてくれる仲間がいた。それは私にいろんな角度から考える力つけるきっかけになった。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました！



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアで学んだこと】

北九州市立大学 法学部 3年生

2016年8月28日から9月4日までの8日間のカンボジア研修を通じて、主にカンボジアの歴史と現状を学び、その学びから考えさせられることも多く、自身にとってとても実りのあるインターンシップにすることができた。ネットや本では知り得なかったような情報も、直接現地の方からのお話を聞き、また写真やテレビでしか見ることのできなかった光景も、直接自分の目で見て知ることができ、実際に現地へ赴いて学ぶ姿勢の重要性を感じた。

トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラー地雷博物館ではカンボジアの歴史を学び、HIV病棟や観光省、ごみ山ではカンボジアの抱える問題など現状を学ぶことができた。そのような数ある研修施設の中で特に印象深かったのがTAYAMA日本語学校である。

まずTAYAMA日本語学校の生徒の方の礼儀正しさに日本人よりも日本人らしさを感じた。また、日本語の習得率についても読み、書き、会話を上手くこなし、とても驚いた。ここでの日本の学生とカンボジアの学生との違いは、1つは学生が皆勉強はとても楽しいと感じていること、2つは日本語を学び、日本語を生かした夢があるといったビジョンが掲げられていることの2点だと考えた。以上の点から、私自身、これまで勉強を楽しいと思って学校に行かせてもらえることに感謝していたか、また将来の夢を目標としたビジョンが掲げていたか、という疑問を持ち、これまでの自分を振り返り、反省することができた。

今回のインターンで学んだことは、これから先の就職活動やゼミに取り組む中で他のインターン生のように直接的には関わりはないのかもしれないが、このカンボジア研修を通じて考えた自分の生き方については、これから日本で生きていくうえで頭の片隅に置いておかななくてはならないものだと思う。帰国して数日たった今、研修中に感じた自身の存在意義の追及の必要性をタスクに追われて忘れつつある。今一度、カンボジア研修の際に感じた自身の日本での生き方、意識の持ち方を考え直し、継続的に考え直す機会を設け、カンボジア研修での学びを無駄にしない努力をしたい。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアでのインターンシップを終えて】

奈良女子大学 生活環境学部 2年生

今回は私にとって初めての東南アジア、発展途上国へのツアーであった。私には、将来発展途上国に行き、その発展のお手伝いがしたいという夢がある。そのための第一歩として、このツアーに参加することを決心した。ツアーに行く前は、私にはカンボジアについてほとんど知識がなく、知っていることといえば、地雷が多くあることと世界遺産のアンコールワットがあることであり、高校で学んだ世界史で、ポル・ポトや民主カンプチアという名は少し聞いたことがあるという程度であった。こういった状況から、私は「カンボジアについて知り、考えを深める」という目標を掲げ、ツアーに参加した。

初めて上陸したカンボジアは、自分が想像していた以上に発展していた。多くの量の車とバイクが行き交い、非常に活気にあふれていた。しかし、道路一つとっても、免許を持たずに運転している人が多いことや、ヘルメットをかぶらずに運転している人が多いということから、まだまだ発展途上にあるのだなと感じた。

このツアーでは、観光業等のカンボジアの良い面だけでなく、ポル・ポト時代に起きた辛く悲しい歴史やごみ山、エイズなどの社会問題についても学ぶことができた。

数ある研修先の中でも、私が特に関心を持ったのは、ごみ山である。おびただしい量のごみがあたり一面に広がっており、しばらくは目を離すことができなかった。ハエが多く、においもきつかった。新しく運ばれてくるごみの中には、泥水のようなものも含まれており、それが不衛生的であるの是一目瞭然であった。しかし、新しいごみは金目になるものが多いため、人々はそのごみのもとへ駆け寄っていく。

ごみ山で実際に生計を立てている人にお話を伺うことができた。大人の男性からは「生活をするために、不健康的だとわかりながらも仕方なくごみ拾いをしている」「農業ができるならそちらの方がしたいに決まっている」「自分の子どもには将来ごみ拾いをしてほしくない」という声を聞くことができた。小学6年生の女の子は、「ごみはくさいからごみ拾いは嫌だ。でも、仕方ないからしなくちゃいけない」と話してくれた。笑顔が少なく、自分の生き方に対してあまり前向きでない人が多かったのが非常に印象的であった。

現在、カンボジアは観光業に力を入れ、急速に発展している。また、イオンモール等の外資企業のショッピングモールやホテル、ビルがどんどん建設されている。こういった状況下では、ごみの量も比例して多くなっていくと考えられる。経済が



発展すれば貧富の格差も広がる。事業に失敗した人はごみ山でごみ拾いをし、成功した人は豊かな生活が送れる、という未来は容易に想像がつく。増え続けるごみをただそのまま積んでいたら、土地が足りなくなる。足りなくなったら別の場所にごみ山を作る。そういったことを繰り返せば、国内の多くの有効利用されるべき土地が、ごみ山と化してしまうことになる。

私は、なぜカンボジアにはごみ処理場がないのか、非常に疑問に思っていた。答えは単純で、お金の問題であった。政府は腐敗しており、わいろが横行しているとガイドさんからお話を伺った。しかし、それでもかのポル・ポト政権よりはましであるため、政権は握れているようだ。政府がインフラ整備にもっとお金をかければ、この問題は解決できるのではと思った。

ごみ山は政府からしても、隠したい問題であるのは確かである。カンボジアが発展していくうえで、遅かれ早かれ、この問題に確実にぶつかる時がくる。対処が遅ければ、解決が非常に困難になってしまう。手遅れにならないよう、早く手を打つべきだと私は考える。

腐敗した政府に納得してもらい、国政予算からごみ処理場建設のための資金を確保してもらうためには、政府にも恩恵が行くようにしなければならない。それをもって、ごみ山で生計を立てていた人の雇用と、安定した給料も保障しなければならない。

KURATA ペッパーの倉田さんから、カンボジアには民間企業はあっても、公的機関はないと伺った。そこで、私は、公的機関であるごみ処理場の建設という考えを思いついた。政府は自身の機関を持つことができるし、隠したいごみの問題も解決できる。また、ここに火力発電の装置もつけければ、自国で電気の供給が行えるようになる。これらはカンボジアの益々の発展につながる。ごみ山で働いていた人は、建設という新しい職を手に入れることができる。職場環境も、以前より衛生的である。また、給料も以前のような日ごとに波があるもので安いものでなく、安定していて以前よりは高いものである。これは、お互いがそれぞれ良い思いができる、ウィンウィンの関係になっていると思う。あまりにもうまい話で、非現実的かもしれないが、これから実際のデータを調べてみて、現実味のあるものにしていきたいと思う。

今まで「発展途上国には多くの問題がある」と漠然に思っただけであったが、今回のツアーで初めて一つの問題に焦点を当て、自分なりに解決策を模索し、考えをまとめることができた。そういった点で、今回のツアーは自身にとって、非常に実りあるものになった。

このツアーを企画・運営してくださった JAPF の方と学生スタッフの皆さんに感謝を申し上げたい。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアスタディツアー】

筑紫女学園大学 文学部 4年生

私は、今回のツアーに参加するにあたって、出発前、多くの人から「カンボジアって治安悪いんじゃないの?」「大丈夫?」と心配されたのを覚えています。現在、世界のいたるところでテロが起こっているというのもあると思います。しかしながら、そのように言ってきたのは、カンボジアを訪れたことの無い人達です。日本では、カンボジアという国について知識があまりない人が多いのではないかと思いました。帰国した今、私は、カンボジアに行くことができ本当によかったなと思っています。そして、今回のツアーで感じたことや学んだことを、カンボジアについて知らない人達、間違った情報を信じている人達に「カンボジア」という国は、とても素敵な国だったと伝えたいと思います。

今回のツアーで最も考えさせられたのは、“幸せ”って何だろう?ということです。日本で生活していると、何不自由なく生活できていることが当たり前のように思ってしまう。日本では、当たり前のように学校で勉強できて、ご飯を食べることができて、働くことができます。しかし、そうではない国もたくさんあるのだということに改めて気づかされました。私達は、物や情報に溢れすぎて、一番シンプルで最も大切な、生きている“幸せ”を忘れてしまっているのではないかと思いました。たくさんあることが当たり前になりすぎて、一つでも失った時に、絶望に陥ったような気がしてしまいます。しかし、そのような人は世界中にたくさんいるのです。何か足りない中でも、足りないなりに一生懸命生きていて、カンボジアの人達はとても前向きに見えました。彼らは、その環境下で楽しむ力、生きる力を持っていると思います。帰国後、カンボジアの様子を親に見せた時、街並みや景色は「昔の日本みたい」だと言っていました。カンボジアを一気に変えてしまったポルポト政権から、たった40年間で、ここまで建てなおしたカンボジアであれば、10年後20年後、もっと変化、さらに発展しているのではないかと思います。そしてなにより、カンボジアであった人達の笑顔はすごく眩しかったです。マーケットでも、HIV病棟でも、日本語学校でも、私が微笑みかけると、笑顔を返してくれて、言葉は通じなくとも、笑顔は万国共通なんだなぁと感じました。

また、毎晩行われた参加者同士のグループディスカッションは、自分には無かった意見を聞くことができ、とても刺激を受けました。参加者のほとんどは私よりも下の学年にも関わらず、はっとさせられることばかりでした。自分の意見を言い合い、思っていることをさらけ出すことで、距離が縮まったのではないかと思います。私達日本人は、周りの目を気にしがちで、自分の意見や意思を表示するのが苦手だと言われています。しかし、意思を表示することで相手がどんな人かわかり、自分がどんな人なのか知ってもらえると思います。何がいい・悪いではなく、自分の考えを自分の言葉でしっかり伝えることの大切さを実感しまし



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

た。

8日間という短い期間でしたが、本当に今までにないくらい濃く、多くのものを吸収できた8日間になりました。新潟、奈良、大阪、福岡、沖縄等、全国から集まった仲間たちと出会い、一緒に過ごすことができ本当によかったです。今回、学んだことを心に刻んで、今まで様々なことに中途半端だった自分と決別しようと思います。そして、自分が持っている限りある時間を、有意義なものにしていきたいです。そして必ず、またカンボジアを訪れます。ありがとうございました。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア研修を通じて】

北九州市立大学 外国語学部 1年生

人生の変わった八日間であった。これほどまでに濃密で、時間が経つのが早く、幸せで最高な八日間は経験したことがなかった。

私は国際的な分野に興味がありながら、海外に行ったことがなかったので、大学生の内に多くの国に行こうと思っていた中、この研修の募集を目にして、すぐに参加を決定した。元々アジアに対して高い関心があったので、カンボジアでの経験は自分にとって大きなものになると確信できたからである。研修を終えてみると予想以上に大きな刺激を受け、自分の中で大きなものが変わった様な気がする。

ツアーの目標として“様々な価値観を知る”というものを挙げていた。実際カンボジアには日本と異なる価値観の人が多く居て日本に居ると味わえないような経験をした。

異なる価値観の日本人とカンボジア人の性格を表す例としてクラタペッパーの倉田氏がおっしゃっていた“アリとキリギリス”の童話が印象的であった。童話では冬を前にして食料を蓄えるアリに対して音楽に夢中で冬の食料に対して楽観的な考えを持つキリギリスが冬になって食料が無くなり困り果てるのに対しアリは食料を蓄えていたので困らなかったというアリの様な生き方を正とする教訓の童話である。“将来のことを考えず今日を精一杯生きれば明日は来る”という考え方のカンボジア人はアリの日本人に対してキリギリスに例えられる。しかし、キリギリスの生き方は悪いのだろうか、確かに一日を懸命に生きる彼らの生活は満足なものではないかもしれないが、濃く、生き生きと感じられた。実際にカンボジアの自殺率は日本に比べてはるかに低い。経済力があるからといって幸せとは限らないのだと知った。ずっと日本で生活していたならアリの生活が正しいとされ、現在働きアリは大勢存在する。実際にカンボジアを訪れたこそ得られた価値観である。この話を通じて日本よりもカンボジアの方が幸せなのだと確信した。

しかし、この考えに対して興味深い考えをしたメンバーがいた。“将来の為に必死に働くアリの生き方もカッコいいじゃないか”と。自分には無かった考えだったので非常に興味深く感じた。研修の毎晩行われたディスカッションでのことであった。この研修では交換日記やディスカッションを通じてメンバーの考えを知ることのできる機会が多くあった。自分には無い考えを聞くことができるのが非常に面白かった。他のツアーにはないこの研修の醍醐味の一つであると思う。カンボジアから多くの刺激を受けたがメンバーからもおおくの刺激を受けた。カンボジアの政治や歴史を夜遅くまで語り合うことによってカンボジアについてもより深く知ることができた。彼らに刺激を受け消極的な自分も積極的に意見を言えるようになった。それによって、研修先でも積極的に質問などができるようになった。この点も研修を通じて変わった点の一つであると思う。積極性の結果この研修ではカンボ



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

ジアの歴史について深く学習することができた。歴史については知識はあったが、実際に実物などを目にして改めてポルポト時代の悲惨さを実感した。しかし、このような歴史について現在の小中学校では教えないという事実には驚いた。この過ちを繰り返さない為にも後世に伝えることが大切だと思う。また私たちも彼らの歴史についても知らなくてはならないと思い、これからカンボジアについてより深く学習していくと同時により多くの人に知ってもらおうと思う。

研修で訪れた施設の一つ一つで多くのことを学ぶことができ、また学校や市場の現地の人を通じて温かみを感じられ、非常に楽しい経験もした。カンボジアが大好きになった。八日間しかいなかったが研修のメンバーも大好きになった。将来的にカンボジアと関われる仕事に就職したいと思った。絶対また訪れたい。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアスタディツアーで得たもの】

奈良県立大学 地域創造学部 2年生

私はカンボジアを訪れることはもちろん、東南アジアに行くのも初めてであった。このツアーに参加した理由は、私の大学・学部は他に珍しい「地域」や「観光」という新しい分野を中心領域としていて、地域との関わりが深く重要で、海外の発展途上国というフィールドに出て自分の視野を広げたいと思ったからだ。また、私はサークルやアルバイトをしながら勉強をしているだけの平凡な毎日を変えたいとも思っていた。実際帰国してみて、この8日間でインターネットや本などの2次情報ではわからない部分を多く経験することができ、日本のありがたさを実感し、ツアーのフィードバックをされていて考えさせられるものが非常に多くあった。

最も印象的だったのは、ごみ山で生計を立てている方たちだった。想像を絶する莫大な敷地に積まれたごみの量と臭いを肌で感じて重大さを改めて感じた。衛生的にも悪いし、ごみを拾って稼いでいるスカベンジャーの人たちの健康被害もとても気になった。また、経済発展と外国人観光客の増加からごみが増えていることも問題だと学んだ。今は学校が休みで親の手伝いとしてごみを拾っている女の子が「勉強は楽しい。将来は小学校の先生か医者になりたい」と話してくれた姿を私は一生忘れないだろう。インフラ整備もまだまだなカンボジアの財政状況でごみ処理施設をつくることは難しいのかもしれない。今後、分別する、土に返る製品に変えていく、缶・瓶などは購入した場所で返す、子供に3Rなどのごみに対する教育をして、ごみ山の危険性について現地の人に考えてもらえるようになればと思う。

また、日本語学校ではたくさんの元気・笑顔をもたらしたが、その反対にマーケットや遺跡の至るところで1ドルを求めて日本語を話し、物乞いをする子供たちを見て心が痛くなった。貧しい国には教育を受けられない子供がいることは元々知っていたが、実際に物乞いをする子供たちの数の多さに驚愕した。教育とは人間の成長・発達に重要なことであり、教育面の課題を改めて実感した。

「日本人とカンボジア人のどちらの方が豊かであるか」という疑問はまだ解消できていない。カンボジアに行くまでは私の住む日本の方が絶対豊かであると思っていた。実際、舗装されていない道路や自給自足の農村を見て、物が困るほどあり贅沢をしている私たち日本人の方が豊かだとも思った。しかし、KURATA ペッパーの倉田氏がされたアリとキリギリスの話にもあるように、将来のことまで考えて不安に生きる日本人より今日を大切に一生懸命生きるカンボジアの方が心の豊かさはあるのかもしれないと考えるようになった。豊かさとは、「経済面だけでなく、笑顔で日々大切に一生懸命生きること」であるのではないかと今回のツアーを通して感じた。

学校を作っても教師・PTA・教育など学校を成り立たせる基盤がない、井戸を作っても正



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

しい使い方がわからないということが発展途上国の現状にあり、支援の意味がないという話を聞いたことがある。インフラ整備・教育・衛生など課題は山積みだが、海外からの支援の在り方も見直しが必要だと感じた。

カンボジアの現状・歴史・文化・観光を直接目で見て、肌で感じて、充実した濃い時間を過ごせた。このスタディツアーで得たものはカンボジアのことだけではない。一緒に参加したメンバー、仲間だ。全国から集まった11人のメンバーのおかげで最高のツアーになった。夜のディスカッションでは自分では思いつかなかったような意見もたくさん聞けて自分の成長材料になったと思う。今回カンボジアスタディツアーで得たものは一生の宝であるし、私の強みになると感じる。今後必ず何かにつなげられるように今は精一杯学業に励みたい。

最後に、引率の方、ガイドの方、一緒に参加したメンバー、そしてJAPFの皆さん、素晴らしい経験ができる場を私に与えてくださり心から感謝しています。本当にありがとうございました。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアが教えてくれたこと】

北九州市立大学 外国語学部 4年生

私はこのツアーに参加する前、一人でカンボジアに日本語教師ボランティアに行こうと考えていました。しかし、JAPF スタッフの友人がこのツアーを勧めてくれ、現地の日本語学校や孤児院に行き教育施設に訪れることができるということでこのツアーに参加することを決めました。しかし、軽い気持ちで参加した自分の創造を越えた知らないベトナムとカンボジアの実状が、私の目に焼き付き忘れられない光景が広がっていました。

ベトナムではツアー病院に行き、枯葉剤で苦しむ子供たちと遊ぶ時間がありましたが、奇形児をいざ目の前にすると後ずさりしてしまう自分がいました。枯葉剤の影響の怖さを知った瞬間でした。また、カンボジアではコサマック病院に行き、メンテナンスがされず放置された医療器具や、どうみても患者数に対して足りない看護師を見て、支援されてできた病院だが、支援した側の最後まで継続性のある支援が維持できてない無責任さを感じました。

教育面では、以前の読み書きさえできれば教師になれた時代が今のカンボジアの教育の質に影響を与えていることを知りました。それは、すべてポルポトの時代に殺された知識人である医者や教師につながることであることをそこで知りました。カンボジアのその残酷な歴史はとても複雑に今のカンボジアが抱える問題に絡んでいました。その歴史を知る人たちにとっても決して忘れることができない過去での出来事だったことを自分の目でしっかりこのツアーを通して見ることでできたと感じています。

そんな恐怖の時代を乗り越えたカンボジアに残された地雷、ゴミ山、枯葉剤に苦しむ人々、教師の質の低下、または医療の未発達などの多くの問題を見ていく中でも、ゴミ山で拾われた孤児達が、かまってほしいととびきりの笑顔で寄ってくる子供達やタヤマ日本語学校で会った将来、輝く子供達が必死に勉強して頑張ろうと努力する姿を見て自分はどれだけ幸せなのか気づくことができました。普通に学校に行くことができ、家族も殺されることなく健康に生きていて一日三食、食べている自分の幸せを身に染みて感じることができました。

孤児院で気づいたら泣いている自分がいました。心のどこかではとても悲しい寂しいと感じている子供たちが無邪気に笑う姿を見ていると辛くなりました。その涙を拭きとってくれた孤児の子たちのために自分ができることは何だろうと帰国してからずっと考えています。今、私ができることはできる限りこのカンボジアの現状を人から人に伝えていくことだと思っています。

また、このインターンシップでできたツアーの仲間たちにとっても感謝しています。彼らから得ることができた異なる観点から物事を見ることは、これから社会に出ていくうえで視野を広げる手助けになると思いました。素晴らしい仲間とこのツアーを無事に終えること



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

ができたことは忘れられない思い出になりました。このツアーのおかげで、自分に足りないものに気づくことやこれからの新たな目標もできました。その目標に向かって、限られた時間の中でしっかり行動に移したいと思います。



【ベトナム・カンボジアを肌で感じて】

名古屋市立大学 人文社会学部 1年生

ツアー中、私が常に考えていたのは、ほぼすべての課題の根底にある「貧困」という開発途上国の現状、そして先進国からの支援の在り方である。

医療現場をいくつか訪問したが、どこの施設でも共通して衛生管理が行き届いていないように感じた。病室はドアが開いたまま、空室があっても廊下のベッドで寝ている人もいて思わず目を疑った。1番驚いたのは、病院の受付に料金表が貼ってあり、患者はそれを見て自分が受けられる治療を確認するということだ。貧しいという理由から、自分が本当に必要とする治療を受けられないのは患者さん自身も苦しいと思うし、病院という存在が100%活用されていない。つまり一部の患者さんにとっては病院という建物が「ただそこにあるだけ」になっているように感じた。また、各国からの支援の連携がうまくいっていないというお話も聞いた。先進国はただ支援すればいいという考えではなく、他国と協力してどうしたら1番有効に支援の効果が発揮されるかまでよく検討すること、さらに継続的に活用されているか定期的にチェックする、など工夫を施す必要性を感じた。

教育面ではドロップアウト率の高さと中学進学率の低さが大きな課題だと思う。日本と同様、9年間の義務教育制だが現状は全然違う。親たちは子供に働き手になってほしいと考えており、国全体としての教育に対する意識の低さが見られた。日本やアメリカの支援によって設立された中学校を見た時、「意外と立派な教育環境があるな」と思った。しかし話を聞くと、農村部では学校に行けない子が多いことが分かった。支援というのは学校を建設したり教育レベルを上げるだけではダメで、まず前提条件として子どもが学校に通える最低限のところまで生活レベルを上げる手助けをしないと何も始まらないように思われる。

また、孤児院では周りからの愛情についても考えることがあった。訪問した際、見ていると私たち1人1人にそれぞれ誰かずっとくっついてきてくれる子どもがいた。最初は可愛いと思うだけであったが、それはもしかすると（実際のところは分からないが）普段から「自分のことだけを見てくれる、愛してくれる」と思える人がいないからなのかな？と思った。私は家族や周りから愛してもらってこの19年間育ってきたと十分理解しているけれど、普段そのことを意識しているわけではないし、当たり前のようにになっている。でも、世界には親から虐待されたり、まず親がいない子もいるんだ、ということを改めて実感して、自分がどれだけ幸せなのかをより強く感じた気がした。

ツアーを通して私自身が成長したと思うのは、教科書やテレビだけではわからないその場の本当の姿を直に肌で感じることで、他人事としてではなく自分に何ができるのか、という視点から考えられるようになったことだ。また、ただ知るだけでなく、毎日のディスカッションで、自分の考えを人に伝えると同時に、自分とは異なる意見を聞いて納得したり驚い



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

たりして視野も広げられた。今回私にとって 1 番足りなかったのは現地の人との交流だと思う。自分としては頑張っているつもりでも、周りを見るともっと積極的に交流していて、そこが反省点だと思っている。今回のツアーでの学びをこれで終わりにせず、自分の中でも考えを深め、周りの人にも伝えていきたい。

このような貴重な経験ができたことに感謝いたします。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【12日間で感じた事】

京都女子大学 現代社会学部 1年生

私がツアーに行く前のベトナム・カンボジアは発展途上国でインフラが整備されていなくて、危険な場所というイメージでした。実際に二か国は発展途上国で、インフラもまだまだで、夜一人で出かけられるほど安全ではなく、反政府派の殺害事件も起こり、日本と比べて快適に生活できるとは言い切れません。しかし、11日間現地に訪れてみて、自分の先入観で判断するべきではないと思いました。

私がツアーで印象に残ったことは大きく分けて二つあります。初めに、現地の人々の心の温かさを感じました。毎日行くレストランでは、「オークン」というと笑顔で「オークン」と返してくれます。また、トゥクトゥクに乗っていて、風景をみているときに道行く人と目が合うと笑ってくれます。このことは日本では珍しいことであり、町に心温かい人が多いことに安心感が持てました。異国から来た私に温かい対応をしてくれる現地の人々から、普段から多くの人々と関わり、協力し合っているんだろうなと思いました。今の日本でのドライな関係に慣れてしまっている私はアットホームな関係を少し羨ましく感じました。

次に印象に残ったことは、子供たちの学習意欲の高さです。ツアーで視察した学校ではすべての生徒が積極的に勉強に励んでいて、居眠りしている生徒などもってのほかでした。学びたいという意欲がとても強くて、TAYAMA 日本語学校では、教室に入った瞬間生徒たちのパワーにとっても驚きました。日本では、大学に進んで勉強することが当たり前になっていることが多く、私自身も親に学費を出してもらって大学で勉強することが当たり前になっていて、大学の授業もなおざりになっていました。しかし、現地では、ひとつひとつのことを聞き逃さず自分の知識として蓄えようとしている姿勢がどの生徒からも感じられました。貧しくて、親の手伝いで学校にいけない子や家から学校までの距離が遠くて通うことが困難になり学校を辞めざる負えなくなっている子など様々な理由で学校に通い勉強することができない子がたくさんいます。だからこそ、通うことができ、学ぶことができている子供たちは懸命に勉強しているのではないかと思います。また、ゴミ山で働く子供が一番楽しいことは学校に行くことと言っていて、夢は学校の先生ということに将来に対する希望を大いに感じるとともに私自身の夢の無さがとても情けなく感じました。日本では環境が整い、恵まれた施設、きちんと教育をうけた教師がいるのに、消極的で受け身である生徒が多く育成されてしまうことにとっても疑問を感じました。また、自分自身ももう一度見つめなおさなければならないと感じました。

カンボジアでは内戦からまだ月日が経っていなく、先進国と比べるとまだまだだと感じる事が多くあります。しかし、町には子供や私と同世代の人達があふれています。彼らは互いに協力しあって生活しているように感じて、貧しくても一日一日を楽しんでいるよう



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

に思えました。だからこそ、町に活気があるのだと思います。若い世代のひとりひとりが自分の国を良くすることや、発展することを考えていて、そのために勉強していたことも私にとって驚きでした。この国はきっと彼らの力で変化する。彼らから、私たち日本人に欠けていることを教えてもらったような気がしました。このツアーを通して私自身成長させてもらったことがたくさんあります。現地の人たちから学んだこと、12日間ともに過ごした仲間たちから受けた刺激。このツアーで得たものを忘れることなく、自分を成長させ、視野を広げて、社会に貢献できる人になろうと思いました。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジア二カ国研修を終えて】

関西大学 政策創造学部 1年生

海外に興味があり観光もしたいと思っていましたが一人で海外に行く勇気がありませんでした。今回この二カ国研修で観光と発展途上国の現状を知ることができると思い参加しました。

このお研修で私が一番考えさせられたことは、「支援のかたち」です。様々な病院や孤児院、現地の学校を訪問して、それぞれにたくさん問題があり、多くの国が支援しているけれどなかなか良い方向に進まないのはなぜかを考えました。ほとんど、毎晩グループディスカッションをして自分の意見を言い、相手の意見を聞き自分たちなりに答えを出そうとしました。正しい答えなんて出ないという結論になった日もあります。しかし、私たちは、訪問しなければこのような山積みの問題を知らないままでした。特に印象に残っているのは、ゴミ山を訪問した時のことです。ゴミ山に住む少年に海外から訪問者が来ることについてどう思うかきいたところ、たとえお金をくれる目的で来なくてもゴミ山に来て知ってくれるだけでうれしいと答えてくれました。だから、具体的に支援金を払ったり、医療機器やきちんとした施設の提供よりもたくさんの人が問題を認識することが大切なのではないかと思いました。

また、ポル・ポト政権時代のカンボジアについて学ぶことができたのも大変良い経験だと思います。日本に住んでいる私たちがどれほど恵まれているのか認識することができました。彼が政権を握っていた時代多くの知識人たちが何の罪もなく処刑され、現在の教育、医療その他の仕事を担うはずだった人々が姿を消しました。ポル・ポトはたった4年間政権を握っただけなのにこの国に大きな負の遺産を残しました。それでも、この国の人々は発展しようと努力しています。バスに乗っているどこから来たかわからない私たちに笑顔を向けてくれます。私はそんな前向きに一生懸命生きるカンボジアの人々が大好きになったし、私が見習わなければならないことがたくさんあると思いました。

日本に帰ってきて、インフラや下水道、ごみ処理機能が整っているこの国は本当に恵まれていると思いました。だけど、恵まれているから幸せか、恵まれていないと不幸なのか、それはまた違う話だと思います。ただ、カンボジアで生活する人々の生活が少しでも豊かになるように、今抱えている問題をたくさんの人の広めたいと思います。今回このツアーに参加する機会を与えてくれた方、かかわってくれた方、たくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいです。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジアスタディツアーを終えて】

京都産業大学 文化学部 3年生

今まで何度か海外に行ったことはあったが先進国ばかりであり日本と変わらない雰囲気のところばかりだった。そのため今回のスタディツアーで訪れたベトナムとカンボジアではそれまでの経験からは想像できない程のカルチャーショックを受けた。だがツアーをきっかけとしてベトナム、カンボジアという国がこんなにも奥深く、魅力溢れる場所だと知ることができた。

一歩空港から出ると四方八方からクラクションが鳴り響き、複数人乗りで走行している数え切れないほどのバイク、横断が難しいほどの交通量、そしてカンボジアに入ると舗装されていない道、ヘルメットを被らず自転車感覚で乗られているバイクなどに最初は少し恐怖を感じていたが次第に新鮮に感じるようになった。日本で日常生活を送っている中で「当たり前」だと思っていた交通ルールやマナーは世界では「当たり前」ではないということを実感した。

今回のツアーで世界遺産であるアンコールワットや周辺の遺跡で音楽を奏でる地雷の犠牲者、未だに若い世代に施されていないポル・ポト政権に関する教育、土産物を買って歩く子供や女性を見て発展途上国であるカンボジアの戦争の傷跡と貧困を知った。だが私たち外国人には懸命に伝えて下さったポル・ポト政権時代の事実を政府の方針でカンボジアの子供たちに伝えられない教育現場の実情、農村部やごみ山等で生活の貧しさ知ったにも関わらずマーケットでは値段交渉をしている自分にジレンマを感じた。「自分が目の前の女の子から土産物の一つ買ったとしても彼女の生活に大きな変化をもたらすことはできないのではないか」と思いつつも今の自分には何ができるのか、何をすべきなのかを考えるきっかけとなった。それはたった10日ほどしか滞在していなかったうえに特別な熱意を持ってこのツアーに参加した訳でも無かったがTAYAMA日本語学校や孤児院、マーケットで働く人々やガイドの方などカンボジアで出会った人たちの前向きで明るい雰囲気にいつの間にか影響を受け、興味を持ち始めたからだと思う。

今まであまり興味や関心の無かったがツアーを通して戦争の傷跡や抱えている問題と共に多くの魅力を感じた。急速な発展を遂げているベトナム、カンボジアに日本で生活する中でも忘れず目を向け続け、いつかまた変化を見に行きたい。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアでの支援】

京都大学 法学部 4年生

カンボジアについては渡航前に歴史等なんとなく理解していたつもりだが、実際行ってみて印象ががらりと変わった。平均年齢の低さも関係しているのか、街は人々のエネルギーで溢れていた。単純な社会の豊かさでは測れない、日本とは違う活気・熱気が訪れた施設、会う方々から感じ取れ、滞在中はカンボジア人から元気を与えてもらうという機会の方が多かった。逆にカンボジアで感じた一番の違和感は、街が支援国の国旗、他国のチェーンやブランド、他国の製品で溢れていたことだ。特に出版物に関しては、クメール語で書かれたものは殆ど無く海外からの輸入書籍が圧倒的に多かった。短期的な経済発展を考えれば、先に進んだ国から次々良いものを取り入れていくのが自然な流れなのだろう。しかし、将来的に自立し「開発途上国」という位置づけから抜け出すためには自国内での産業の育成が不可欠だ。「カンボジアブランド」を増やすという認識の下で先進国も支援することこそが今のカンボジアに必要であると感じた。「〇〇国からの支援」という形ではなく、カンボジアの財産としてずっと残っていく形での支援が理想的だと感じた。KURATA PEPPER さんやアンコールクッキーさん等はこういった理念のもとに成功された例である。

支援というと、先に発展した国が、内戦等様々な事情で経済発展が遅れてしまった国に手を差し伸べる、助けてあげるといった印象が強い。しかし、研修を通してこうした先進国側の支援の捉え方が意思疎通の欠如さらには支援した施設が使われず無駄になる事態を引き起こしているのではないかと感じるようになった。プノンペンの貧困地域にあるコサマック病院では、医療機器等設備が支援で導入されたものの上手く使いこなせず放置されていた。支援とは、本来その国の政府・人民が行うはずのことを、技術・能力が追いついていないために先進国が代理して実行するという大変責任の重い仕事だ。ただ他国という立場から施設を建てる・モノを与えるだけではなく、しっかりそれらを使いこなせる人材を育成し国の中で定着するまで支援する側は責任を持つべきだと強く感じた。

この研修では、毎日ディスカッションを行いカンボジアの課題について話し合った。そこで改めて実感したのが、思考することを止めないことの大切さだ。何事も「難しいよね」の一言でまとめることは簡単だが、解決策等もう一歩先まで考え発展的な議論をするのは中々難しい。常にアンテナを張って情報収集しどうすれば良くなるか自分なりに考え続けることが重要であると感じた。どの社会の発展段階でも問題・課題は山積していて、日本でもカンボジアの抱える問題とは異なるが、取り組むべき課題は山ほどある。カンボジアと日本を単純比較せず、今回カンボジアで感じ考えたことをヒントに日本社会、日本とカンボジアの関係、ASEANのあり方について今後も思考を止めずに自分なりに模索し続けたいと思う。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジア・ベトナムスタディツアー】

京都府立大学 生命環境学部 3年生

以前カンボジアに観光に訪れた際アンコールワット遺跡群の美しさに心惹かれ、もう一度訪れたいと思っていたのが今回スタディツアーに参加したきっかけでした。また、一般的なツアーでは見られない発展途上国の側面を研修できるということから、日本だけでなく世界にも視野を広げられる社会人になりたいとの思いも持っていました。

しかし、この考えは恵まれた環境で育ったことによる傲慢な考えだったとスタディツアーを終えた今となっては思います。

農村やゴミ山で暮らす方のお話を聞いて、この生活に不便さはあるけれど環境に満足して生活していることがわかりました。実際に見学に行くまでは、学ぶためや治療のための設備、衛生環境に様々な課題があるように感じており、現地の方も不満に思っていることが多いだろうと考えていました。その認識の差に驚きました。見学した後に行ったディスカッションでも、日本のような発展が必ずしも良いとは限らないため、発展するべきという考えは日本の恵まれた暮らしに慣れている日本人のエゴではないかとの意見もありました。日本の学生である自分が何をすべきか、また自分が何をできるのか深く考えさせられました。

勉学に熱意を持っている方の様子からも、自分がいかに環境に恵まれていたかを痛感しました。国の発展の礎となる教育をするための人材が1970年代の内戦によって足りないという現状のカンボジアで、自分がどのように生きたいか明確な目標を持ち学んでいる姿に自分の甘えに気付かされました。今まで自分が学ぶということに対してただ、与えられているだけで興味のない分野や難しいなどと理由をつけて真剣に自分から学んでいなかったのだと身に染みしました。

スタディツアーの中で発展途上国という分野に興味を持っている様々な大学のメンバーと出会えたことも大きな財産となりました。毎晩行っていた交換日記やディスカッションでは、同じ研修をしていても様々な考えを持っていて、どうしてその結論に至ったかも人によって異なっており自分の考え方との違いがとても興味深かったです。また、自分にはない知識を持っている人に話を聞かせてもらえたのも自分の思考の偏りに気付く貴重な経験となりました。その幅広い知識の得方も教えてもらったので、参考にして知識を幅広くする努力をしようと思います。また、単なる知識で終わらせずに偏りのない思考を続けていくことを口先だけでなく、有言実行できるようにすることが今の私にできる最大限のことだとわかったことが、このスタディツアーで得られた最も大切な経験でした。

最後になりましたが、このスタディツアーに携わり、貴重な経験を与えてくださった方々に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【今の私】

東京外国語大学 言語文化学部 2回生

私はこのツアーに参加するにあたりなにか強い意志があって参加したわけではない。夏休み、長い長期休暇をだらだら過ごすくらいなら参加してみよう、という軽い気持ちで申し込みをした。しかし参加し終えた今、心底行ってよかった、と思えた。なぜなら、実際に現地に行きベトナム・カンボジアの実情を知られただけでなく、今の自分の現状や環境を見つめなおすきっかけにもなったからだ。

まず自分の知識不足。事前学習で多少は調べてきていたがそれだけでは足りず、お話を聞いていたただ情報量に圧倒されてしまった。他のメンバーはすぐ手を挙げて質問しているが自分は情報を消化しきれずあまり質問をすることができなかった。ディスカッション内でも話しているとき単語が出てこなかったり、説明してる時あいまいになってしまったりしたことがあった。また、大学に入学してから中東やアジアを以前より身近なものにかんじていたが決してその地域について知識があるわけではない。ただ表面の薄っぺらなことしかまだまだ知ることができていない、ということを感じさせられた。

その一方で自分の興味が想像以上に広いということに気付けた。特にカンボジアでは多方面に及ぶ分野の方々からお話を聞くことができたわけだがどの分野に関してももっと知りたい、と思えた。専門性を持って一つのことを学ぶのもいいが政治、経済、教育、文化、開発など様々な分野を幅広く知っていきたい。

大学では自分の興味のある分野を深く学べると同時に興味がないものをどんどん排除していってしまう、というデメリットがある。それを実感した日々だった。高校までは嫌でも理系や歴史、芸術などを学べることができた。しかし今では偏った分野のことしか学ばなくなってしまっていた。勉学としてではないが教養として知っておくべきことはたくさんあるのに排除してしまっていると思った。自分の興味のあることを思う存分知ることができただけの時間を持っていながら有効活用できていなかったのだ。

このスタディーツアーに参加したことで東南アジアのことをもっと知ろうと思えるきっかけになり、また自分の生活を振り返るきっかけにもなった。自分が今まで学んできたことは無意味なものではなく、大切な知の財産。これからもどんどんこの財産を増やしていきたい。

【カンボジア・ベトナムスタディーツアーを通して学んだこと】

龍谷大学 文学部 3年生

12日間の研修で学んだことは大きく分けて三つだ。それは、コミュニケーションの取り方、発展途上国への支援の在り方、ベトナムやカンボジアの人たちと日本人の考え方の違いについてである。

研修では、病院や孤児院などで子供たちと交流する時間があった。しかし、最初はどう交流してよいのか戸惑いを覚えた。この戸惑いの原因は普段のコミュニケーションの多くが言語に依存しているからだと思う。同じ言語を話す人でも自分の気持ちをうまく言葉にできない人や、異なる言語を話す人とのコミュニケーションにどういった方法があるのか、これからの大学での学びにおいて意識的に考えていきたいと思う。

JICAや病院の研修で、発展途上国への支援の在り方について、考えさせられることが多くあった。支援する側と支援される側の意見の食い違いや、支援がそれを受ける国の自立をサポートするものになっているかどうか、一言に支援といっても考えなければならない課題が多くある。また、そのような課題解決にはJICAのようなプロの組織でも、多くの時間を要するのが現状のようだ。また、経済発展の支援はカンボジアの場合ゴミが適切に処理されず、そのまま処分されるという問題を誘発する。発展や支援というと、どうしても良い意味に捉えがちだが、これからはもう少しその言葉の背景にあるものを考えようと思う。

意識の差については、主に病院の研修で感じた。ベトナムのツーザー病院やカンボジアのコサマック病院、シハヌーク病院など、衛生面からいうと明らかに汚い。また、病院の診察時間は午前のみで、午後は病院のスタッフも少ないようだ。そして、一番の問題は看護師の医療知識の不足や、医学を学んでいる学生の段階で、実際の病院の医療現場で注射を打つなどしている現状である。日本人からすればありえないことばかりだが、現地の人たちにとってはそれがあたり前で、特に衛生面についてはあまり問題視していないようだった。ある意味この意識差が、日本の病院とベトナムやカンボジアの病院の差につながっている。ベトナムやカンボジアの人々がもっと国の医療に対して、問題視する声を上げれば、もう少し現状が変わるのでないかと思う。国の政治に関しても汚職が多く、信用できないという人も多いだろうが、それらについても国民がもっと声を上げれば変わるのではないだろうか。

12日間の研修は非常に充実したものだ。しかし、12日間の学びは非常に限定的なものだ。これからの大学生活で、もっとその学びを深めていこうと思う。



【シェムリアップのゴミ山から考えたこと】

龍谷大学 文学部 2年生

ゴミ山では、カンボジアの現状とこれからについて考えさせられた。シェムリアップ市街を抜けバスで走ること数十分、のどかな田園風景が目に入る。ぼんやりと眺めていると次第に重機で掘削された大きな穴がちらほら見えはじめ、間もなくゴミ山に到着した。これまでの人生で一度も見たことがないゴミの量、悪臭、湿気に圧倒される。周りには青々と茂る水田を取り囲んでいる。

ゴミ山の管理人の方から話を聞くと、このゴミ山は8年前からできたそうで、来る途中に見た穴もいずれゴミ捨て場になるという。スカベンジャーズが拾うのは換金価値のある缶やペットボトルが主で、月100～150US\$と、カンボジア人の平均月収ほどを稼ぐ者もいるという。普段は農家だが、たまにここに、言わば「小遣い稼ぎ」をしに来る者もいる。また、子供たちは午前か午後学校に行っている。場所と衛生さえ目をつむれば他とほとんど何も変わらないのである。そして、彼らの生活と密着している。ふと、ゴミの山を見た。僕らが飲んだ水のペットボトルのゴミもいずれここにたどり着くのかと思い、同時に一昨日訪れた観光省での研修を思い出した。観光省では2020年までに外国人観光客数を今より200万人以上増やす目標を掲げ、新たな観光の開拓を進めている。観光客が増えれば観光業、商業を中心に経済は回っていくだろう。だがそれと並行してゴミの量が右肩上がりになるのは避けられない。果たして現在のカンボジアに増えるゴミを対処する余裕があるだろうか。答えはノーだ。現時点で、ゴミ処理施設がない、スカベンジャーズの生活がある程度成り立っている、ゴミの回収が民間業者によって行われているなどのあらゆる点から、効果的にこのゴミ山問題を打開できる策は見当たらない。

論文を書いている、「ゴミ山問題を打開」という言い回しもどうかと感じ始めた。非常に日本人的で、主観的である。僕はここを訪れるまで、なぜ焼却炉など処理施設をつくらぬのか、甚だ疑問であった。だが、上に述べたように、ゴミ山はそこに住む人たちと密接に関係している。ゴミを積んだトラックが来ると彼らはそれに群がる。僕らには価値のないものに見えるが、彼らにとっては価値がある。その現状を見てしまった。それゆえ、一概にゴミ山はなくすべきだとは言えなくなった。思わなくなった。

ただ、このままの状態をずっと続けていくべきか、変えないでよいかと言われれば、僕はそうではないと思う。蓄積されたゴミは間違いなく環境、人々に悪影響を及ぼす。そのことをまずカンボジアの人々に広く認知させていくことが第一歩で、カンボジア政府が中心となって行動を起こしていく必要があると考える。それは、政府が未熟な教育面に力を注ぐということにもつながってくる。そしてゴミ処理場、分別所などを作れば、そこに雇用も生まれる。スカベンジャーズの生活も保障されるのではなかろうか。そして日本人の僕らがして



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

いくべき支援というのは、そういった体制が整ったとき初めて出てくるのではないだろうか。正直、現状ゴミ山に僕らが施すべき支援は見当たらない。僕らはカンボジア人でないし、ゴミ山から恩恵を受け生きているわけでもない。カンボジアより発展している日本で、生まれた時から過ごし、日本の大学に通う、日本人の大学生だからである。そこには圧倒的な壁がある。こうってしまうのは僕の知識が足りないからだろうか、頭が柔軟でないからだろうか。考え方が足りないのだろうか。いずれにせよ、ゴミ山での研修で、僕は「自らの未熟さと無力さ」というものを痛感した。現状作り出すべきは、ゴミ処理施設でなく、カンボジア政府の余裕であると感じた。



【JAPF ベトナム・カンボジア スタディーツアー12日間を通して】

北九州市立大学 外国語学部 4年生

現地に行って、感じたことはたくさんある。感じることはたくさんあるだろうと行く前に予想していたが、様々な側面から学び、感じ、そして考えさせられることが予想していたよりもたくさんあった。それらを論文という形で文字に起こすことで、十分ではないかもしれないが少し整理してみたいと思う。

まずは、教育の大切さ、必要さを肌で感じた。これはカンボジアでの研修になるが、カンボジアでは皆が満足に教育を受けることができていない。そして、ポルポト政権の悲惨さを子ども達に伝えたり、意見を言ったりすることはタブー視されている。国が成長するには、その国の将来を担う子ども達に教育の場をきちんと整えることが必要であるのに、運営費や人件費、地方と都市の格差など課題は多い。また、ポルポトの時代を二度と繰り返さないためにも伝えることで風化させないことは大事だと思うが、それができない現状。すぐ解決できる課題ではないがきちんと向き合うことは大事だと感じたし、学ぶということが発展や成長、人々の夢を叶える手段と感じた。

しかし、カンボジアの子ども達から教育の姿勢を学ぶことは多かった。日本語学校や孤児院では皆すごく元気で、私達から少しでも何かを吸収したいという思いが伝わってきた。ゴミ山の子どもは学校が一番楽しいと言っていた。水上学校では、クラスの生徒の半分以上が将来の夢は教師と答えていた。日本では教育を受けることが当たり前すぎて、ありがたさを理解していない。現に私も授業中居眠りをしたり、怠けたりすることもある。カンボジアの子ども達が皆教育を平等に受けることができないと実感した今、普通に教育を受けている私たち学生は教育を受けられることに感謝し、もっと必死に一つ一つの授業に取り組むべきだ、と思った。

他にも、日本での不自由ない暮らしについても考えさせられる部分は多かった。農村の生活では電気がなく、トンレサップ湖での水上生活では地上での生活に比べては制限が多く、不便は多いのかもしれない。しかし、それは私が日本で生活してきた観点からそう思っているだけで、彼らからするとないのが普通で不便とは思っていないのかもしれない。そのため、私の目には彼らの生活が縛られるものが何もなく自由気ままに生活しているように見えた。日本での生活は便利さを追求しすぎて、ないとすぐ不満に繋がる。生活での不便さを楽しめるような余裕のある人間になりたいと思った。

また、支援についても考えさせられた。国際的な支援というのは、その国の現状だけをみて助ける表面的なものではなく、その国の過去も未来も価値観も考えながら、継続的で自立を目指す支援が本当の意味での支援だと、このツアーを通して実感した。ベトナムでもカンボジアでも多種多様な人達がいる、過去の過ちや障害を乗り越えながら今がある。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

このことを肌で感じて知ることができ、次に私達が日本に帰国してできることはなんだろうか。個人的として、私は来年社会人。観光業の道に進むことが決まっている。それと関連して渡航先の支援という形でできることはあるのだろうか。ちゃんとした答えはすぐには見つからないが、自己満足的な交流や支援で終わるのではなく、様々な課題にきちんと向き合い、長期的な視野で物事を見ていきたい。そして、世界の現状を理解したうえで活動していきたい。「知っている」と「知らない」ではやはり大きな、大きな違いだ。

このツアーでは、自分の反省する点も表れた。大きく分けて2つ。1つ目は自分の知識の乏しさ。ディスカッションや意見を共有する場ではアウトプットすることも多く、知識は武器だと感じた。知識があると説得力が増すし、なにより心に残る伝え方ができる。今の日本での生活は情報を選んで自分の興味のある分野しか情報を仕入れていない。世界史や政治にもっと関心を持とう。そのために少しでも日本にも世界にもアンテナを張っていききたい。2つ目は無意識的にステレオタイプで物事を見ていたこと。常に自分の観点だけや、一方的な見方をしないように心掛けていたけれど、少なからず自分の基準で見ていた部分はあったと思う。これからは決めつけで物事を語ることはやめよう。

最後は感謝で締めくくりたいと思う。出会った人達は皆優しくて、笑ったら目を見て笑い返してくれる。様々な場所を訪れたが、どこもウェルカム感で溢れていた。だからこのツアーが実りあるものになったと思うし、刺激的だった。もちろん、メンバー、頼りある引率者、ガイド、裏でこのような機会を与えてくれた方にも感謝したい。そして今当たり前のように健康で教育を受けてきて、元気に生きていけることに感謝したい。これからも考えることをやめずに、社会に貢献できる人材になりたい。本当にありがとうございました。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【カンボジアとベトナム、現地に行ってわかったこと】

京都大学 総合人間学部 1年生

発展途上国の問題とはなんだろう。日本で暮らす中でもそのことについて考えることはある。しかし、12日間のベトナム・カンボジア研修で、日本では思いもつかなかった課題を知ることになった。そして、もう一つ自分の知識の少なさを感じた。

今回の研修で、特に考えさせられたことは二つある。一つ目は、教育問題についてである。これは、特にカンボジアで思ったことである。日本にいるときに、カンボジアに対するボランティアといえば学校を建設することという勝手なイメージを持っていた。実際に、現地でお話を聞いてみると、確かに学校の数は十分とはいえないらしい。けれども、学校の数よりも、優秀な先生の数や、国からの支援の少なさ、または、教育格差などが課題になっている。例えば、国からの支援は、公立中学で1人当たり1,5ドルという。明らかに足りていない。国の将来のための投資ともいえる教育にお金がかけていないと、長期的な発展は難しいのではないかと。しかし、いまはまだ、教育にかける余裕が足りないであろう。

二つ目は、支援の在り方である。日本にいるときに支援といえば、募金をして、どこかで使われているのかなと思っていたが、支援はただ送るだけでは不十分だということを学んだ。カンボジアの病院の廊下で見た、他国から送られてきたという医療機器たち、支援されたとしても、うまく使いこなせなかったり、維持費を出せなかったりと、結局活用されていなかった。あれでは、ただスペースを取っているだけであった。JICAのように人材及び技術支援する方では、うまく機能している様子が見れたので、あのような、相手の国に対し将来的に自立させる形の支援を考えなくてはいけないのだなと思った。

今回、二か国の様々なところを12日間かけて回ったことで、たくさんの刺激を受けることができた。問題点だけでなく、良い点もたくさん見つけた。とくに、カンボジアとベトナムの人たちがとても元気なことだ。元気すぎる。そして、とても意欲的で、学ぶべきところだ。このツアーに参加できたおかげで、今後、日本で新たなことを学ぶとき、より多角的な視野で物事を見ることができると思う。



【ベトナム・カンボジアの今を見て】

中央大学 文学部 2年生

このツアーで学んだ最大の事は、現地の視点に立って考える力だった。出発前の私は、発展途上国と聞いて「貧しい国」というワードが真っ先に出てきていた。間違っていない。確かにインフラが整っていなかったり、学校で十分に学べない子どもがいる。しかし、このツアーを通して、その中で生きていく人たちは果たしてそれを不満に思っているのか疑問に思うことが多々あったのだ。

例えば、シムリアップのある農村での生活。彼らには屋根が違えども家がある。服がある。食べるものは木になる実であったり、豚を家畜している。もちろん私がこの生活を見たとき、正直暮らしていけないと思った。電気も通っていないし、図書館や病院といった公共施設もない。しかし、彼らの生活には最低限の衣食住は成立している。また彼らの中には、今の生活以上の生活を知らない者もいる。今の生活に満足している者もいる。

ツアー中、この農村に何が足りないかを仲間と議論した時に、私たちが比較する対象が「日本での生活」であるがゆえに便利さを求めてしまっているのではないか、という意見が出た。彼らが今以上の裕福な生活を知らないのと同じように私たちも日本の生活しか知らない、という極めて初歩的で当たり前だが、重要なことに気づいた。

多角的な視点を持つということは難しいことなのかもしれない。しかし、自分の持つ考えに、他の人の視点から見た意見や、その国の人の価値観や異文化といった視点を人生の中で知識として加えたり、お互いに尊重していくことはできる。そうすることで人として成長していくのではないかと感じる事ができた。

国民が政治についてもっと興味を持つことは、政治が独走してしまった時の抑止力になる。ポルポト時代に国民の知識がもっと高く、行動力もあれば、多くの人々の多様な意見を国が吸収することができたであろう。日本で選挙制度が18歳に引き下げられた今、一番私たちに求められているものは政治への興味関心なのだと思う。だからこそポルポト時代から私たち日本人が学べることは、人まかせにするのではなく、今何が起こっていて日本はどのような立場にあるのかについて一人一人が考えを持つことなのかなと今回感じた。

このツアーでは様々な病院や学校を訪問してきた。子どもたちは生き生きとしていて、好奇心旺盛だ。日本語学校に行った時、私が担当したクラスの子は、八ヶ月という短い期間で日本語を学び直接会話をしようとしてくれる子ばかりだった。また、水上学校や農村のフリースクール、孤児院の子どもたちは環境は違えど、学ぶ意欲は私たち日本人以上。将来の夢を聞いたところ、ほとんどが教師と答えた。

”先生になりたい”という答えを聞いて、私は学ぶ意欲がすごいんだなと単純に思ってしまった。しかしあるメンバーから、この”教師”という答えはそれだけではなく、身近に



ある職業が少ない中で教師という職業しか知らないからそう答える子もいるだろうという意見を聞いた。率直に自分の考えが浅はかであることを思い知った。特に農村に住んでいる子どもたちは、他の職業に触れ合う機会が少ない。もっと沢山の職業を子どもたちに知ってもらい将来の視野を広げてほしいと思った。

アキラー地雷博物館に行って、一つ気になったことがある。この博物館は孤児院も併設されていたのだが、孤児院の訪問や見学は禁止されていた。「孤児院は博物館ではない。孤児院訪問はアジアの大きな問題である。子どもの悪用を私たちは許さない。」という看板があった。深く考えさせられる文だった。孤児院訪問のあり方をもっと考えていかなければいけないと感じた。同時に孤児院の存在は、そこで生きる子どもたちにとってはなくてはならないものであるけれど、国としての根本的な解決にはなっていない。訪問という形で本当に子どもたちにしてあげられることは遊び相手くらいで、自己満足になっていないだろうかとふと自分に問いかける一件となった。

子どもは見世物ではない。これはベトナムの平和村でも感じたことだ。枯葉剤の影響で身体が歪んでしまったり、手や足がなくなってしまった子どもたちを見た時、一瞬思考を停止してしまった自分がある。どう接していいか分からなくなってしまった。”偏見を持たないで”とよく言うが、実際にその影響によって今も苦しんでいる人を目の当たりにすると、咄嗟に何も動けなくなってしまう自分に怒りを覚えた。

今回、三つの病院にも行った。一つ目は前述した平和村のツーズー病院。二つ目はカンボジアのシハヌーク病院。この病院は治療費が無料で高度な医療サービスを提供している。ここではHIV患者の治療に注力しており、実際に患者さんにもお話を聞くことができた。HIVと聞くと、日本人の私たちにはどうしても馴染みが薄く身近に感じられないことが多い。もちろん日本にも患者さんはいるが、私自身どこか教科書の中のもののように感じてしまっていた。お話を聞いてみると、患者さんは思いのほか入れ替えが激しいのが印象的だった。地方から来る人も多く1ヶ月ほどで退院する人が多い。全体的な患者は昔と比べて減っているものの16歳～18歳の若い患者さんが多くなっていると聞き、この国の同じ年代の子たちにとってはすごく身近な問題だと知った。

三つ目の病院は貧しい人が多い地域にあるコサマック病院。色々な国から支援を受けている為、救急車は中国支援だったり、病棟ごとに支援国がばらばらだった。そのため救急病棟が病院の一番奥に存在したり、室内の窓の有無が病棟で違うといった衛生面や便宜が良くない点が多々あった。支援国同士のコミュニケーションや統一感が課題だと思う。入院患者のベッドが足りず廊下に放置されていたり、そもそも病院側の人材レベルが低く、床ずれの知識がないため患者をそのままにしまったケースもあるそうだ。また、支援物資の治療機器が放置されているのも気になった。故障しても予備のものがなかったり、直せる人材がいなかった。支援側はモノをただ与えるのではなく、その後の継続的なメンテナンスが必要なのではと感じた。

この12日間で他にも沢山の場所を訪問した。その中で常に感じていたのは、発展途上国



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

の自立に繋がる支援が必要であること。自分の知識がまだまだ不十分であること。それから、日常的に疑問を生み出して行動力・発言力をつけること。このツアーで終わりにするのではなく、日本に帰ってから、自分の目で見たと感じたことをどう自分のものにしていくかが大切だと思う。まだまだ勉強することが沢山ある。自分に今ある生活環境に感謝して知識を深めていきたいと思う。

最後に、一緒に過ごしたメンバーにはディスカッションや日々過ごしていく中で沢山の視点をもたらした。皆で意見交換や共有することで毎日が勉強となった。本当に有意義な時間を過ごせたと思う。これからここで見つけた自分自身の課題や発展途上国について、この機会を無駄にしないように生活していきたい。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【ベトナム・カンボジア スタディツアーを通し】

筑波大学 人文・文化学群 2年生

この12日間は、私の人生の中で、普段にはない刺激を受け、視野を広げることができた貴重なものでした。行動力を持つ、思考することをやめない、というのは、これからも私の人生の課題になりました。私は口先だけのことが多いです。口先だけ、「自分ができることを探す」とか「カンボジアの為にやれることをやる」とか「孤児院の子供たちが、ゴミ山に住んでいる子供たちが笑顔で幸せに生きられる世界にしたい」とか言いますが、実際には何も行動出来ず、結果も残せずにいます。そして、この論文を書いているだけでも自覚しますが、本当に私は自分のことばかりなのだと思いました。基本的に「自分」が「どう生きるか」「自分が生きているこの世界をどうしたいか」それにばかり関心があって、他人が困っていても、根っこでは、自分が悪者に思えてしまうから笑顔でいてほしい、という考えでいます。皆との対話を通じて、綺麗ごとばかり言う自分の、そんな偽善者のような側面にも気づくことができ良かったです。気づくことができたなら、もうあとは変えるか成長する努力をすればいいだけだと思うので。また、このツアーを通じて、自分の中で悩んでいたこと、考えていたことは、まだまだ世界の様々な事象の氷山の一角にすぎないのだと思い知りました。天才でもない私のちっぽけな頭と体で出来ることなんてたかが知れているのかと絶望しそうにもなりました。しかし一方で、孤児院の子たちの笑顔に元気をもらったりして、80億人もの人々が地球上に生きていて、その一人一人がこの社会を成り立たせているのだとも思いました。今は、たくさんのことを摂取するだけして、具体的に何をすべきなのかを明確に出来ていません。しかし、このただの学生の私に今すぐ出来ることは、このツアーで学んだこと・感じたことを身近な人と共有することだと思います。日本に帰国してから、溢れんばかりの学んだこと、受けてきた刺激を、身の回りの人に話して対話しています。そしてさらに様々な意見を摂取して、自分の思考も膨らませていきたいです。人と対話すると、どうしたらよいのか、どう考えていけばいいのか分からなくなることも確かにありますが、対話すること、考えていくことはずっと続けていきたいです。ぐちゃぐちゃと考えがまとまらなくなってしまったことの一つが、「発展」についてです。発展する、発展させることが、本当に「善い」ことなのか分からなくなりました。現状に満足することはないし、不満があると、より「善い」制度や社会を望んでしまいます。しかし、カンボジアが数十年後、日本のようにインフラが整備され、教育制度も整い、医療制度も整ったとして、果たしてそれでみんなが今よりも「幸せ」になるのでしょうか。当たり前のように「発展させる」こと、それを手助けすることが善いことだとは思えません。今の日本はカンボジアよりも発展はしていますが、自殺者数も比にならないくらい多いという現状もあります。何が善いことで正解なのかは、未来を知ることが出来ない私たちには選択のしようがありません。そして、



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

どういう道を選んでいくかは、その時の権力者や大衆の快の大きさによって決まってしまうと思います。しかし、一度進んでしまったら以前と同じように戻ることは出来ないので、安易に多数派が善いとしていることに乗っかるのではなく、メリット・デメリットを考え、進む道を決めていくことが大切だと思いました。このツアーに参加することが出来て、本当に良かったです。ありがとうございました。



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

【スタディーツアーで学んだこと】

大阪大学 人間科学部 1年生

「英語が出来ない」というのはいろいろなところで、私の挑戦を妨げてきました。これまでたくさんのツアーや企画を目にしてきましたが、条件のところに、「日常会話レベルで英語が話せる方」と書いてあるのがほとんどでした。ですから、私は、海外に行くためには英語が必要不可欠なんだなと思い込んでいました。その時、たまたま知ったのが、JAPFのツアーでした。ちょうど東南アジアに興味を持っていたので、思い切って説明会に行き、私が質問したのは、「英語が話せなくても大丈夫ですか？」という情けないことでした。対応してくださったスタッフの方は、笑顔で「大丈夫です！ 私も話せませんでしたから」と答えてくださり、「英語が出来なくても参加できる海外ツアー」というのに惹かれて、私はツアーに参加することにしました。

ツアーを終えて、真っ先に実感したのは、そんな私の浅はかさでした。私は英語という言葉の壁にとらわれすぎて、英語さえ何とかなれば、何でもできると無意識に思い込んでいました。英語が出来ても、相手の文化や歴史を知らなければ本当に理解しあうことはできないし、場合によっては、言語よりもそれらを優先して学んだ方がよいのかもしれないと思いました。それを感じられたのは、現地の人々が日本語で話してくださったのと、言葉が通じないままでもコミュニケーションをとることができたという二点が要因だと思います。現地の人々が私たちの言葉である日本語で、ベトナム戦争やポルポト政権について話してくださっても、私はもともとの知識が少なかったので、自分の感じた疑問や興味をきちんと言葉にすることが出来ませんでした。それから、平和村や孤児院の子供たちと交流をした際は、お互いに何を言っているかはさっぱりわからなかったけれど、目を合わせて微笑み合い、一緒に遊ぶことで、絆が生まれました。

英語力のなさに悩まされ、海外を恐れていた私は、このツアーで初めて、「英語が全てではない」と感じる事が出来ました。そして、世間でよく言われている「英語はツールに過ぎない」という言葉をやっと完全に理解し、かえって、今まで以上に、英語を学ぶ意欲が増しました。英語が全てではないけれど、さらにたくさんを学び、たくさんを発信していくために、英語をきちんと学びたいと思いました。

また、このツアーに参加したおかげで柔軟性のある考え方を身につけることができたと思います。今までは、例えば、〇〇国が××(戦争、内戦など良くないこと)をした、と新聞に書いてあれば、ひたすら〇〇国を糾弾しているだけでしたが、ツアーを終えてみると、何故〇〇国は××をするに至ったのか？ そうすることでのメリット・デメリットは何なのか？などと深く広く考えられるようになりました。例えばどこかの国が戦争



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

を始めたとしても、何も知らずに「戦争はいけない」と批判するのと、背景を知り、そう言った経緯をよく考えた上で、「戦争はいけない」と批判するのでは重みが違うと思います。たまたま、戦争に至った経緯やそのメリットを知った上で、戦争をやっても仕方ない、と言う人がいますが、私はその考え方には反対します。いくら戦争にどうしようもない経緯があり、メリットがあったとしても、戦争はしてはいけないものだと思います。

このツアーで、私は、自分の未来の可能性を大きく広げることが出来たと思います。このツアーは私の考え方を広く、深く、柔軟にしてくれました。ディスカッションを通じて、他人の意見を聞く力も身につけることが出来ました。

自分が成長したことはひしひしと感じていますが、身につけた思考力によって考えていくための道具となる知識はまだまだ足りていないと思っています。私はありがたいことに大学に通えているので、せっかくの環境を活かして、今は、たくさんの知識を吸収したいと思っています。このツアーで学んだこと、ベトナム・カンボジアで出会った人たちのことを忘れずに、知識をたっぷりつけ、思考を止めないでいようと思っています。